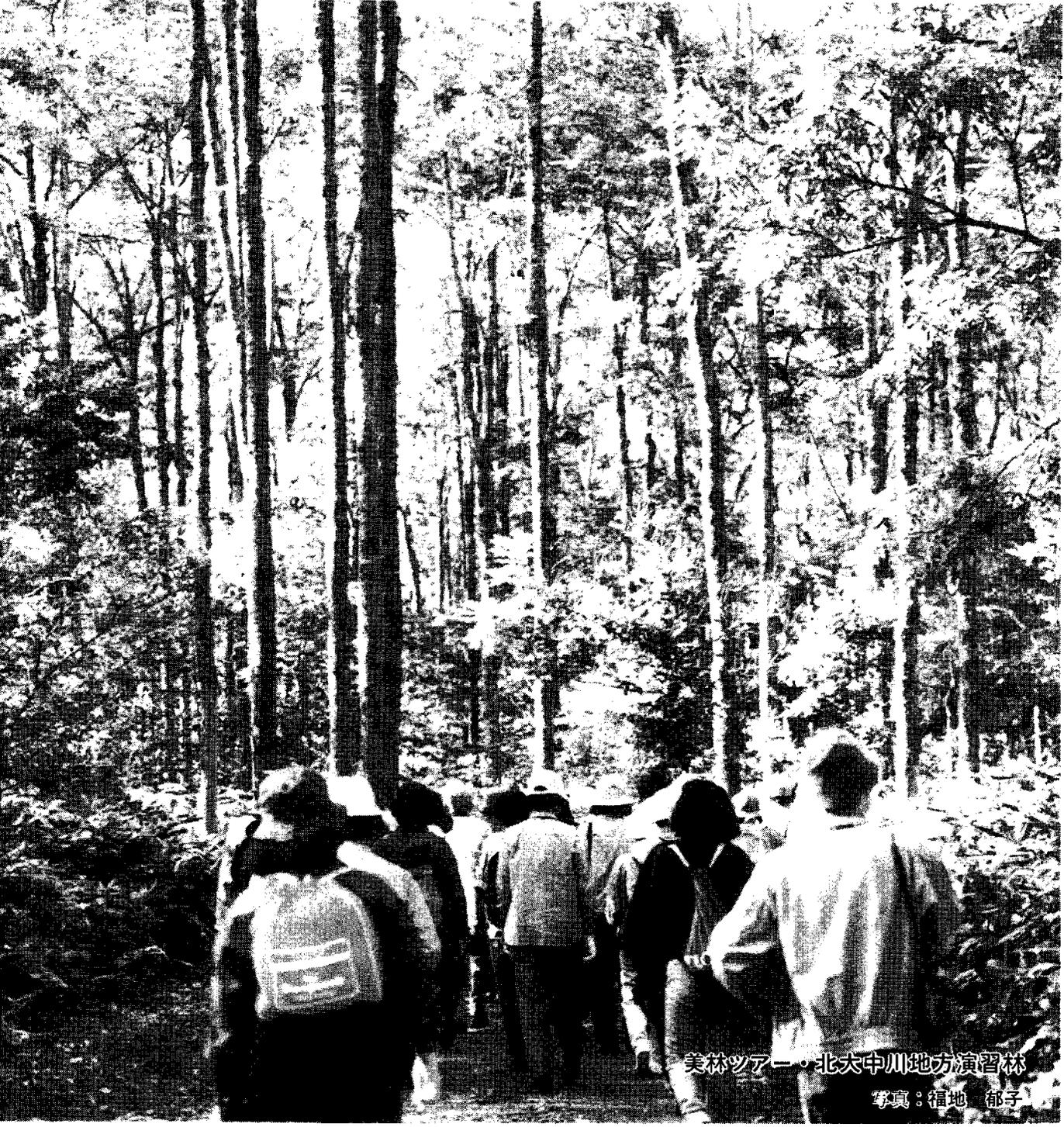


北海道自然保護協会会報  
Nature Conservation Society of Hokkaido

1989年10月号

No. 68

# NC HOKKAIDO

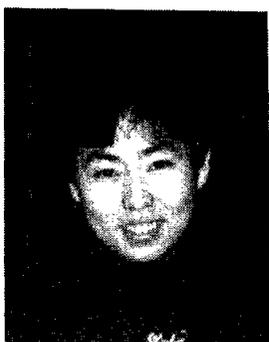


美林ツアー・北大中川地方演習林

写真：福地 郁子



## 牛と共に 暮らした夏



千田 亜紀

タラップを降りると、ひんやりした風に思わず身震いした。辺りは一面、霧うわつ、来ちゃった。ついにここが、思っただけで来た北海道。さあ、これから一ヶ月、どんな生活が待っているのだろうか…。

私はこの夏、別海町のある農家のお宅で、農作業のアルバイトをしました。人間が、自然と共に生きていく、ということとを、体で知りたかったのです。心配する親を説得し、一人、釧路行きの飛行機に乗ったのです。

農家の人達は、みんな笑顔でむかえてくれました。問題は、牛と仲良くなれるかどうかです。夕方、牛を入れた牛舎へ行くと、もう牛達は牛舎の前に集まっています。大きな重い扉をガラガラ開けると、牛が、我先にと自分の場所を目掛けて走っていきます。ひずめの音が牛舎中に鳴りわたります。

大きなロールに巻いた牧草の上におじさんが登って、ザックザックと切ってほぐします。とたんに、草の発酵した臭いが立ちこめます。それをフォークですくってリヤカーにのせて運ぶのですが、これがなかなか重い。おまけに、牛がすぐに頭で奪い取ろうとするので、すぐにひっくり返ってしまいます。

牛が草を食べている間は、人間達のコーヒープレイクです。タンクの中からいくらでも牛乳を飲んでいい、と言われ、さっそくひしゃくですくってよく冷えた牛乳を飲んでみました。おいしい！甘くて、これが「牛乳」の味だったんだな、という感じ。

搾乳は、パイプラインとポンプとで行います。おじさんに教わったことを心の中で確認しながら動きます。まず、牛の体に触れてから、牛のそばに入ることに

牛に対しても、あいさつが大切なのです。それから、ポンプを牛のお乳につける時には、牛によりそって、安心させる様にする。そして、後足でけられないように、腕をそえておくこと。牛にもいろんな個性があって、搾られている時の反応も様々でした。じっと前を見つめる牛、隣りにちょっかいを出す牛、じたばた足踏みする牛。

私がいた間に、七匹の仔牛が生まれました。最初に立ちあつたお産は、お腹の中で仔牛が前足を折り曲げていた為、獣医さん呼んで伸ばしてもらい、その後仔牛の前足にロープを結びつけて引っぱりました。「せーの」で四人がかりでぐつと引くと、すぐに前足が出て来ます。それから、舌をべろん、と出した鼻先、頭、母牛も必死です。胴がずずつと出て、とたん、丸々牛の形をした仔牛が生まれました。ぎゅっこぎゅっこお腹を押して、呼吸をはじめたら、一安心。よかったですね。生まれてよかったね。きょとんとした顔の仔牛も、少したつと立ちあがってしまいます。「牛を養いながら牛に養われている」ことが実感出来て、とても面白かったです。

(学習院大学生・東京在住)

## 知床シンポジウムの 印象



竹下 壽

今回北海道自然保護協会より、「日本の森と生活を考える知床全国シンポジウム」の知らせがあったのを機とし、未知の知床を観るため家内と早速参加を申込んだ。はじめての参加であったが、森と自然を守る多くの自然保護団体が一堂に集まり「知床宣言」ができれば上がる経過を見届けた。参加者には若い人達も多く、なかには卒論に取り組んでいる人もいて活気にみちていた。女性パワーはこれから期待されよう。知床を漠然と知っていたが、そこから日本全体の自然保護につながる具体的行動が生じたことを実感した。斜里町長選挙に勝利をえたことがその最たるもので、その道のりは大変だったと思う。

車中、斜里岳の端麗な姿が見え、斜里

に来たことを喜んだ。8月11日、知床海岸・森林コースへのバスの窓からみた海別山麓の造成はどうもリゾート開発のもののように。美しい自然のなかで斜面を下る土の帯は不調和である。急斜面が海岸に迫る頃、川がオホソックの海に注ぐあたりに眼をやると、砂防堰堤があるではないか。これには驚いた。知床半島の小河川にも、そこを溯るサケその他の魚がいるはずなのに、ここで門前払いをくってしまったではないか。堰堤ができた以前、のぼってきた魚はどこへ行ったのだろう、国後か択捉か。経費はかかるかもしれないが、魚が遡行できる工事にしてもらいたかった。国防予算のほんの〇、数%でよい、たとえ小さな河川でもサケ類に門戸を開いてくれるよう、砂防堰堤に替わる工事をしていただきたいと思う。あとで土木技術者に聞くとそのような工法はあるという返事だった。

12日から始まったシンポジウムで感じたことを一口でのべると、よくわかっていないはずのことが、実行となるとそれは裏腹に出てくるような習慣性のあることであった。保存林であるべき原生林をなぜ伐採するか―原生林の一部だけしか保存林にしてなかったところに問題がある。保存林と伐採林とが連続したエリアにあつてはならない。原野にこれ以上にスキー場や、毒をまくゴルフ場をふやそうというのだろうか。知床横断道は歩いてゆく山道でよかつたはずだ。金余りの企業に好都合で、住民の将来を考慮しな

いリゾート法案は最近まれにみる悪法であるか、それについて沢山のことを聞いた。国有林の独立採算制は前時代的のもので、「森林自衛隊」で表現されたように、一般会計で支えて再出発すべきだ。地球環境について東京会議が開かれようとしているいま、防衛費は、人類を地球を見えざる敵から守るために、太古の森を保存するため、美しい森を育てるために使うべきだ、北海道の自然はそう教えた。

(北九州在住)

## オタワの四季

児玉 秀臣



「一寸待って下さい。オタワにも四季があるんですか。夏と冬だけのように思えるけれどなあ、これはかつてカナダを訪問された若い研究者の会話中の嘆息である。確かにオタワの春と秋は短かく、それぞれ夏と冬の延長に入れられないこ

ともないから彼の想いは間違いいではない。季節の推移は客観的に認識される以外に何か微妙な自然と人間の交流に於いて実感されるものではないかと思うのは年のせいだろうか。

私達がオタワを定住の地と決めてから四半世紀になる。アパート住いの滞在初期にはクリスマスに用意される屋外のイルミネーションが特に美しく思えて、寒さに凍えながらも写真を撮りに出掛けたものだった。雪化粧した縦に何百とつけた豆電球で照明したのが特に美しい。モノクロームのこともあり、ポリクロームでも丈夫に配色されていて、それぞれの家の趣味が出ていて面白い。どんな暖冬でも十二月の下旬までに積雪があるので私達はホワイトクリスマスを見逃した経験がない。雪が積れば長い冬もそう退屈でなく家族に手頃なクロスカントリー・スキーで週末を過ごす。郊外に出れば至る所野原だからスキー場には困らない。ダウンヒル・スキー場によくある瀟洒なヒュッテは求められないが家に帰るホットチョコレートでも飲めば山小屋気分のはやりは出来る。三月に入ると弱々しかった冬の陽ざしも何となく活気づいて南斜面の庭の雪が溶けて芝生の緑が顔を出す。風のない午後の日ざしに何を間違えたのか野兎がヒョコヒョコ裏庭を歩き廻る。クロッカスの花が咲き出すと順を追うようにスノードロップ、水仙、ヒヤシンス、グレープヒヤシンス、チューリップが続く。乾き切った木の枝にも新芽に

水々しさが漂う。そんな頃温和なある日、澄んだ音色で囀り合う鳥の声で目を覚ます。北米大陸でお馴染みのロビンである、アメリカのジョージア州辺りから来たのだろうか。彼等はミミズ取りの名人だ。雨のあと地面からミミズを引出しているロビンをよくみかける。時には地面を嘴でコソコソとたたいて誘い出すものもある。長旅のあと十分栄養を摂ると今度は巢作り之余念がない。ロビンの卵は雀の卵よりふたまわり位大きいだろうか、その青磁色が鮮やかである。私達の家の軒下に作った巣には三個の卵が入っていた。雛がかえると親は餌集めに大童である。静かな夕方高い電線に止って美しい声で鳴く時が二羽の親鳥にとって唯一の憩の時のだろうか。雛達の成長は目に見えるようで小さな巣から三羽がはみ出さんばかりになるまで一ヵ月かからぬい。或静かな日の朝方、親鳥が全くいつもの時と違う鳴声を出した。巣立ちの時だと直感、当時小中高にまたがる三人の子供達を外に呼出した。鳴声は丁度怯える子供を励まし誘導して何かをさせる時のような響きがある。身体こそ大きいは何とも弱々しい羽ばたきで飛立つより巢からとび降りた。子鳥が親に追いつがろうとすると、わざとのように親は少し離れて誘うように導く。親鳥の口には子鳥達のために用意した餌があった。ロビンの子の胸は灰褐色の地に黒い斑点があるので少し赤味を帯びた茶褐色の親とすぐ区別がつく。嘴の黄色が妙に目立って何

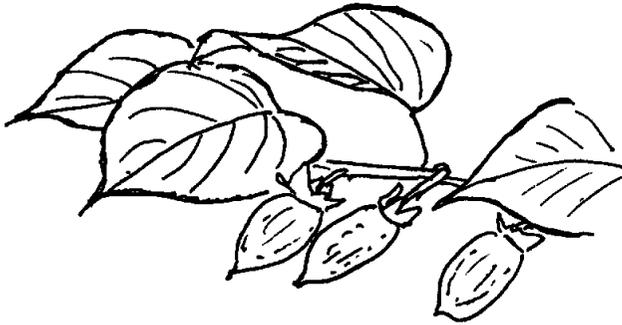
とも幼い。観察に夢中になっていた子供達の姿が印象的であった。

庭で子鳥がホッピングする頃にはリンゴ、ブラックチェリー、スズランの花も終りで、ライラックの香りが寝室までしみ込んで来る。オタワの夏の陽ざしは強烈である。鮮やかな緑でふくらんだ木々はあの白一色の真冬には全く想像もつかない。冬見えたビルが見えなくなると街を縦断する運河に水がなみなみと蓄えられカヌーが静かに水面を滑る。オタワの北側に見える準平原状の岡はカナダ楕状地の一部に当たる。そこには氷河で造られた無数の湖があり動植物の短い夏の活発な生活の営みが見られる。時にはビーバーがダムやロッジの補修をしているのを見かけることもある。

私が務めている研究所の窓から見える一本の楓がいつも他の楓よりも一足先に紅葉をはじめ。これを一番に十月の中旬位まで美しい東カナダの秋が様々な色合いで目を楽しませてくれる。ドラマチックな紅葉は燃えるような紅色が変色してない緑と鮮やかにコントラストしている時だろう。街の公園には至る所でリス達が冬ごもりの支度に忙しい。紅葉が終わるとはく息も白く冷い空気が肌をさす。そんな日の夕方雁の一群が南西の空に向かって旅立つ。夕日に映える空にV字型の編隊を組み鳴声を残して彼方に消えると雪の降る日も間近かである。街に住みながらこういう自然とのふれ合いが出来る私達は幸いと思う。でも気になる

ことはこの十年位年々僅かながら変化して来ていることだ。自然と人間社会との間の微妙なバランスが少しづつくずれているに違いない。手ばなしで美しい自然の鑑賞ばかりしてられない。自然の一員として人間が自然を守るために努力する必要がある。此頃である。

(カナダ在住)



自然事典 19 豆

地衣砂漠

辻井達一(北大農学部教授)

大気汚染が強まるにつれて植物の生育は困難になってゆき、汚染に対する抵抗力の大きいものだけが生き残ることになる。植物の中では地衣類がもっとも抵抗力が低く、SO<sub>2</sub>やNO<sub>x</sub>などの増加によっていち早く姿を消す。したがって地衣類の消滅は大気汚染の進行を告げる信号とされ、地衣類の失われた状態を、生きた植物の少ない状態にたとえて地衣砂漠と呼ぶ。

地衣類は藻類と菌類の共生体で、その分布はきわめて広く極地から熱帯にまで及び、乾燥や低温にも強く、もし月や火

星に植物が存在するとすればそれは地衣類であろうとさえ考えられた。その生育は土壌からの養分吸収によらず、水はもっぱら大気中から摂取される。そこで大気の成分が育成を左右することになる。

大気を通じて放射性物質の吸着も行われる。チェルノブイリの事故による放射性物質は北ヨーロッパのクラドニアなどを通じてこれらを食料とするトナカイに蓄積された。地衣類は都市でも自然でも大きな信号としての意義を持っていることになる。



*Cladonia rangiferina*

ハナコケ

# 「日本の森と生活を考える知床全国シンポジウム」にて

当協会会長 八木健三

北海道自然保護連合、北海道自然保護協会、知床自然保護協会の三者が主催したこのシンポジウムは八月十一日～十三日の三日間、斜里町公民館で開催され、連日二〇〇名をこえる参加者があり、熱心な討議が行われた。

初日の十一日は森林、羅臼岳、海岸の三コースのエキスカッションが行われたあと、夜は「知床の夕べ」が公民館で開かれた。現地の合唱サークル「春の森」の皆さんによる合唱組曲「知床の森」の歌声が会場にこだまし、参加者の胸にひびいていった。

北大苫小牧演習林長石城謙吉氏の講演「森への想い」は、十六年にわたる苦心の施業の結果、演習林がいかに美事に育っていったかをスライドで示して、感銘深かった。

第二日(十二日)は協会常務理事中野徹三氏の基調講演「国民との協同こそ問題解決の道」につづいて、大阪市大教授宮本憲一氏の記念講演「日本の地域開発と自然保全」があった。ここで氏は多年

にわたる研究調査をふまえ、地域住民の積極的な参加による「内発的発展」こそ、真に地域の発展につながるものであり、現在のリゾート開発のような「外来型開発」は自然を破壊し、大資本を利用するのみで、地域の振興にはつながらないことを力説した。幾多の実例をあげての持論はきわめて説得力にとみ、参加者に大きな感動を与えた。

このあと、知床自然保護協会会長石井政之氏の知床問題の総括的報告があった。午後は全国報告にあてられ、岩手の白藤力氏のブナ林、長野の和田歳次氏のリゾート開発と自然保護運動、室蘭の二井田高敏氏の室蘭岳スキー場、東京の鈴木實太氏の尾瀬のオーバーユース問題に関する報告がそれぞれ行われた。とくに尾瀬における入山料問題に議論が集った。

夜は「全国交流会」で、全参加者のたのしい集いの輪が会場一杯にひろがり、苦勞した裏方の実行委員会の紹介をはじめとし、全国各地からの代表が壇上で挨拶した。そして全員が肩をくんでの「知床旅情」の大合唱でその幕を閉じた。

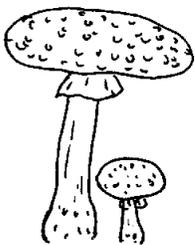
第三日目(十三日)まず、林野庁経営企画課長、高橋勲氏の特別講演「新たな国民のための森づくりについて」があり、前日登った羅臼岳の印象とバイロットフォレストの話を前提として、「林業と自然保護に関する検討委員会」の事務方としての見解をのべ、今後、国有林は(一)自然維持、(二)空間利用、(三)木材生産の三つの観点から施業のあり方を考え、国民の共有財産をよりよくしてゆきたいと結んだ。いろいろの問題点があったが、討論の時間のなかったのは惜しまれた。

このあとシンポジウム「森林のあり方と自然保護」が開かれ、パネリストには協会理事寺島一男、長野県自然保護連盟和田歳次、日本自然保護協会参事工藤父母道、えぞ山岳会今村朋信、協会副会長俵浩三の諸氏が、中野徹三氏の司会でそれぞれ体験をふまえた森林観をのべ、とくに国有林、国立公園などの管理をふくめたひろい自然保護の進め方について、熱のこもった討論が交わされた。

午後はテーマ別の討論会で、(一)ブナ・原生林問題と森林行政(二)リゾート開発問題と住民運動(三)アイヌ文化と自然保護(四)都市近郊林と自然保護の四つの分科会がもたれた。私はこのうち第二分科会に出席したが、八甲田山の開発計画を住民運動で中止に追いこんだ青森の報告に拍手がわき、夕張岳スキー場反対運動を上げまされた。またリゾート法は廃止をふくめ見直すべしと論じられた。

最後は知床シンポジウムに参加した二三八名による知床宣言が発表された。宣言の最後に「日本の森の危機は世界の森の危機の一部です。世界中のひとびととともに森を守る新しい連帯の輪を創造しましょう」と、日本と世界のひとびとに知床からの呼びかけをして幕を閉じた。

思えば丁度三年前のいまごろは、知床国立公園森林の伐採問題で日本全体が大きくゆれていたのだった。さまざまな苦しみ、悲しみ、そして喜びを経て、ここに開かれたシンポジウムは終わった。私は深い感慨が胸の底からこみ上げてくるのを禁じ得なかった。



# 地球環境の危機についての考察

毎日新聞編集委員・飯部紀昭

従来、環境問題といえは、60年代から公害を伴って環境を汚染し、それが健康に悪影響を及ぼすというのが代表的なものであった。象徴的な出来事が、四大公害裁判となった水俣病、イタイイタイ病、四日市公害、大阪空港訴訟である。これらのおそろべき公害事件によって、日本は世界的にも公害先進国といわれ、日本経済の高度成長がきびしく問い直されることとなった。

七十年代にいったても、大気や、水汚染、騒音、地盤沈下などの公害は一向に沈静せず、公害列島、公害の広域化などとして重大問題化した。こうした環境汚染について農業や、食品添加物により食品公害も顕著になり、森林資源の乱獲による自然破壊も進行してきた。

こうした時に、かなり衝撃的な本が世に出た。一九七四年に翻訳出版されたアメリカのレイチェル・カーソン女史の『沈黙の春』

と、有吉佐和子さんの『複合汚染』である。六十年代初めにアメリカ各地で、農業や、化学肥料によって川や湖が汚され、鳥や魚、昆虫などの生物が死に瀕していることを告発した『沈黙の春』は日本で農業禍が問題になる10年も前に、未来を予測していた。人類がまったく経験しなかった化学薬品が環境の中にあふれだし、土壌、水、野生生物、そして人間に浸透する、そのことによって、核戦争と同じような危機がおとずれる。この本の中にこんな一節がある。「自然は沈黙した。うす気味悪い。鳥たちは、どこへ行ってしまったのか。みんな不思議に思い、不吉な予感におびえた。ああ鳥がいた、と思っても、死にかけていた。ぶるぶるからだを震わせ、飛ぶこともできなかった。春がきたが、沈黙の春だった。「いったいなんのために、こんな危険を冒しているのか、この時代の人はみんな気が狂ってしまったのではないか、と未来の歴

史家は、現代をふりかえって、いぶかるかもしれない。」

翌年の一九七五年に発行された『複合汚染』は、小説家の有吉さんが精力的に全国の汚染現場を訪ねたり、市民運動のグループから取材したルポルタージュである。排気ガスで汚れた空気、工場廃水でほろびる川、化学肥料と除草剤で死んでいく土。食品にふりかけられている殺虫剤、防腐剤、着色料……。一つの化学物質の毒性はいわゆる許容範囲であっても、幾つかの物質が同時に作用するとき相乗的に毒性が高まるという警告をさまざまケースにわたってわかりやすく語っている。自然と生命とをいかにしてとりもどすかという問いかけは、大きな反響をまきおこした。

『複合汚染』のその後、残留農薬のチェックや飼料添加物の規制などによって一応、「食卓の安全」に目配りされてはきたが、有吉さんが警告した状況はあまり変わっ

ていない。その証拠に、食べ物にたいする不安はさらに強く、自然食品や無農薬野菜などにたいする消費者のニーズは高まる一方なのである。

さて、公害先進国の汚名をそぐため、日本は環境庁を創設し行政面での取組みを強化する一方、企業も公害防止に相当力をいれてきた。このため、大気汚染や河川の汚濁、いわゆるコンビナート公害といったものは確かに緩和されてきたといえそうである。

それでは、今、何が問題なのだろうか。それは、もちろん日本をふくめた、むしろ日本を中心とした地球サイズの環境問題といえる。日本によってひきおこされた「環境の危機」がその国の人々にとつてがまんならない段階にきているという深刻な問題が幾つもある。カーソン女史のいう「未来に対する責任」が日本にこそ問われているといっても過言ではないだろう。

まず第一に、熱帯雨林の消滅という問題である。日本は世界の熱帯木材の四割を輸入している。そして、毎年、地球全体で北海道と九州を合わせた面積の森林が失われている。熱帯林の減少が何を招くかは大変深刻だ。資源の枯渇という面以上に環境破壊の方がで

ある。言うまでもないことだが、森林は、大気を浄化し、土壌をつくり、気象を安定させる最大の功労者である。虫や微生物、野生生物など、生物種の宝庫であり、その遺伝子こそ人間の生活に大きな恩恵を与えてくれる。バイオテクノロジーなどはその最たるものである。地球の温暖化や酸性雨、砂漠化などの問題に最も影響の大きいのが森林、とりわけ熱帯林の減少なのである。東南アジアからの木材輸出の七割は日本向けである。商業伐採や、焼き畑農業などによって森林が失われているわけだが、そのいづれも現地は食べるためにそうせざるをえないという実情がある。増え続ける人口、貧困、そのために、手つとりばやい自然資源の食い潰しをするわけである。いろいろと当事国に問題があることは事実である。為政者や資本家が私腹をこやしたり、少数民族のおいだしに悪用したりとさまざまな問題を抱えている。しかし、いづれにしても、いまのところ当事国は問題解決の方法が見出せないのが現実である。

結局のところ、先進国が資源乱獲以外の方法で、経済自立を支えてやる必要がある。

アジア・太平洋地域における日本の問題は森林だけにとどまらな

い。エネルギー、食糧、金属、そして水、海洋資源などを収奪していることは、いまや否定できないことである。それは、欧米を抜いて、世界に君臨する日本経済の実態である。その、先導役は多国籍企業である。海外に生産基地を作り、地元産業を吸収し、地元労働力を手中におく多国籍企業に対する反発は私たちの想像以上に大きい。

『私たちの享受しているこの豊かさ(みせかけであるにせよ)は、アジア・太平洋地域の人々の犠牲の上になりたっている』(日本消費者連盟、竹内直一代表委員)

私たちは、けっきょくのところ、エネルギー多消費型の暮らしのありようを替えて行かざるをえないのである。省エネ、クリーンエネルギーの開発、一次産業の復権、そして、最終的には全体で生活レベルを下げることにしかないのではあるまいか。

一方、日本の環境に目を向けても、大気や、水、土壌の源である森林の荒廃がとりわけ深刻である。今年一月、環境庁が発表した自然環境保全基礎調査(緑の国政調査)によると、人間の手が加わっていない、純粹の自然植生(手つかずの自然)は国土の二割弱、中でも、わが国の代表的な森林であ

るブナ自然林は、十年前に比べ東京都の面積の二倍以上が消えた。いまや、平地ではみることができず、山岳地帯に分断して残っているだけとなってしまった。

古代メソポタミア文化は緑豊かな水辺に栄えた。自然林の減少は、とりもなおさず、国土の実質が貧弱になっていることを物語っているわけだ。私たちは、破壊に歯止めをかけると同時に、自然林の修復、復元をはからなくてはならない。

ここで一つ、森林破壊の問題点として、最近クローズアップしてきたのがゴルフ場である。リゾートプランの一端として全国いたるところであらたなゴルフ場計画が持ち上がっている。一九八七年に成立した『総合保養地域整備法』(リゾート法)がゴルフ場建設ラッシュに拍車をかけた。さらに、企業の金余り、によるマネゲームの対象になっている。リゾート法による全国の開発面積は、なんと東京を除く北海道―沖縄までの国土の二十パーセントにおよんでいる。

アルファートマムの場合、何と九十ホールの造成計画がある。国立公園外であるとはいっても、これによって失う森林は膨大である。道内のリゾートプランはほとんど、

ど、スキー場、ゴルフ場、ホテルの3点セットである。ゴルフ場問題を考える全国ネットワークなどの市民団体も結成され、環境庁や道庁も重い腰をあげた。いまのところ、規制された農業がどの程度使用されているかを確認するところまでとどまっているが、すでに本州ではキャデーの健康被害が表面化している。いづれ、森林そのものの消失とからんで、大きな問題になるだろう。除草剤より、殺虫剤(有機リン系、普通の農作物にはあまりつかわれない)の毒性が強く、いまのところ、水や空気、土をどの程度汚染するかのデータはないが少なくとも、川下の住民にとつて深刻な問題となるのはさけられない。

これまで述べてきたように、環境問題は実に生命や健康と密接な関わりをもっている。私たちが食べ物やレジャー、なにげない日常生活の中で環境を汚し、使い捨てるの習慣にあまじうしていることによって、私たち自身の未来を危うくしていること、そして、そうした便利さや文明の発展にのみ心を奪われていくことによって結果的に第三世界の人々から資源を奪い、少数民族の聖地を奪っていることに思いをよせる必要がある。

(札幌市在住)

# 自然観察指導員 講習会（当麻町） に参加して

松原 恵子

洗濯物を干したり水をやったりするために、毎日ペランダに出る。ちょっと見上げてニヤリとする。見上げる先には「マカロニ鍾乳石」がある。

ペランダの天井、そのまん中にひびが走り、その端から手すりめがけて水滴が落ちる。雨の日ばかりではない。晴れていても落ちることがあり、うっかりすると布団をぬらす。その落ち口には四、五本、他にも何ヶ所かあってあわせて二〇本にもなる。長いものは六センチ、短いものは五ミリにもならない。根もとは灰色、先になるほど乳白色のストローみたいなへんなものに名前があることをしっけたのは、当麻鍾乳洞であった。天然の環境ではないので「マカロニ鍾乳石」と呼んではいけないうのだけれど、私だけの楽しみである。

こんなところにも自然の法則は生きている！自然は手を抜いていないんだなあーなんて変な感心をしたながら、当麻鍾乳洞とそこに繋がる森や虫、参加された方達の懐かしい顔を思い出すことにしている。以前、沖繩に居た時、加藤祐三先生の琉大公開講座「くらしの中の地学」を受講した。その同窓会で二、三ヶ月に一回のペースでハンマー片手に県内を巡った。「埋立地の地盤沈下」を振り出しに各回担当者を決め、先生に指導をあおいだ。地学は実におもしろいものだった。けれども北海道に来てからは離れてしまった。

当麻講習会参加を前に目を通したのも木の本であり鳥の図鑑だった。「観察会」とか「自然保護」として目につれるのは、たいがい植物であり動物であり昆虫であったので、地層や岩石や鉱物はちょっと違うのかなと思うようになっていたらしい。ところがその講習会で地学と再会した。



まず二日目早朝の実習、宿舎裏の山道でチャートを示され、山頂では將軍山、親子山の成り立ちをきいた。九時からは当麻鍾乳洞の見学であった。その後、鍾乳洞の裏手、コガタズズメベチの巢のある露頭で、ハンマー片手の八木先生が断層の説明をされた。「あ、沖繩の時と同じだ。」うれしくなり、そして構えていた心がほぐれていった……。

当麻講習会では森や木、虫たちとの様々な出会いがあった。出会わせていただいたと言った方がよいだろう。優れた方々の中で私にもできるのだからかと心細くなっている。窓ごしに「マカロニ鍾乳石」をみる。管を伝わる水滴も鍾乳洞の地下水脈も他の沢山の流れとともに海へ流れて行く。途中で蒸発しないためにも努力しなくては、と改めて思う。

（千歳市在住）

# 湿原ふたつ

枋内 信子

広漠としたサロベツ原野、アカエゾマツが、みごとな枝ぶりで点在する松山湿原、この度の「美林ツアー」で見た、ふたつの湿原のすばらしさは、簡単なことでは到底言いあらわすことはできないけれども、見たまま、感じのままを書いてみたい。

美しい容姿を海に沈める利尻富士を望み、振り返ると、ただ一直線に地平線の続くサロベツ原野。折しも夕日が西の空を茜色に染めて、水平線上に沈もうとしていた。空の色は刻々と変化していく。この原野に立って、この空を眺めながら、いかにも「阿」云の呼吸のように、息の合った風景に、ただ感嘆するばかりであった。サロベツ原野にはバンフレットにあるような、エゾスカンユリ、コウホネ、トキソウなど湿原に咲く独特の花は季節のずれから、見ることはできなかつたけれども、枯れたワタスゲの中に、エゾリンドウの紫が、鮮やかであった。

急坂が続く。ゴゼンタチバナの群落。枯れたマイヅルソウも赤い実をつけていて、秋を感じる。朽ち木に、たくさん、おしいそうなきのこが出ていたりして、きのこの育つ条件のよさを思わせる。澄んだ鐘の音が聞こえて湿原はもう近い。やがて開けたところが松山湿原であった。木道を歩き始めると、サロベツでは、あんなに切望しても見ることのなかったモウセンゴケが、小さな小さなへらへら、五本の指をばつと開いたように、唸るほどある。ここにも、あそこにも。エゾイソツツジの蕾。ヒメシヤクナゲの小さな枝とところどころに立っている、プラスチックの立て札の花の名前を読むと、花の盛りには、どんなにか華やかにこの湿原を変ええるのかと想像されるけれども、立ち枯れているギボウシ、ワタスゲ、



その中に、雨風に耐えて深い緑のまま立っているアカエゾマツの雄姿は何ともいえない。自然の造り出す形の美しさには、頭が下がってしまう。帰りの展望台近くの道端に可憐なピンク色をしたネジバナが、頭の先まで身をよじらせて咲いていたのが、印象的であった。

手つかずの自然、あるがままの自然を残していきたい。これは本音である。人々は湿原の中の特異な植物を見ることを求め、その美しさを賞で満足する。無制限に湿原に踏み入れれば、湿原の乾燥化は進み、笹などの進入を防ぎきれない場面が生じてくる。そこで木道をつくり、花の鑑賞もしながら、湿原を守っていかねばならない。およそ二万ヘクタールにも及ぶ泥炭層の湿原が、この北海道の北の地に残されていることの貴重さ。気の遠くなるような長い年月を経て、出来上がったこの湿原に比べて、一瞬を駆け抜けるように過ぎ去っていく現代の地球人が、この自然を傷めつけるようなことがあってはならない。こんな考えを、はつきり目の前に見せつけてくれたことが、この旅の収穫であった。

（札幌市在住）



# 花に魅せられて 「夕張岳にスキー場はいらない」

植物写真家 梅沢 俊

## 自然と人

インタビュー  
福地 郁子 (協会常務理事)

植物、山岳写真家として活躍していらっしゃる梅沢俊氏に夕張岳スキー場問題などを中心にごつてみました。日中はほとんどフィールドに出ている貴重な時間をさいていただきました。

☆月並みですがご専門の昆虫からどうして植物などの写真家になられたのですか。

☆昆虫も大変植物と関わりがあり、以前より植物には興味を持っていました。山登りを始めてから平地にない、大変厳しい環境の中で花を咲かせる高山植物に魅力を持っていましたところ、7年間大雪山で蝶の取材に同行させていただいた日本の山岳写真、高山蝶の生態写真家として草分け的存在であった、田淵行雄先生にお会いしたのがきっかけです。先生はこの春他界されましたが、先生を介して植物図鑑の仕事(日本の野生植物・平凡社)をするようになり植物との付き合いが始まりました。

☆めざす花などに必ず逢わなければならぬ時どうしてですか。花のほうで呼んでくれますか。

☆今日目指すのはこの植物、この花という前提で行きますから植生などから判断して直観的にあるなという事が分かります。だからどこを探せば良いかという事の効率が年々良くなりました。直観めいたもので他の人が見付けられなかったものを見付けたという事もあります。

☆カメラを通して花の魅力を伝える難しさなどありますか。

☆図鑑の仕事が多いせいでしょうかどうしても図鑑的な写真的撮り方になってしまうが、花の魅力を中心に引き出すとなると気持ちの切り換えがなかなか大変です。最近では以前とは違った、いろんな角度での撮り方をして、一つの花にかけ時間が長くなります。その中で皆様に共感を得るものでカレンダーを毎年出しています。難しさといっても被写体自体が美しいので変に撮る事もなく素材をストレートに出せば皆に喜ばれます。

☆カメラ機材もどんどん使いやすくなり一般の方も植物写真を楽しむようになってきましたがいかがでしょうか。

☆山に行ってもカメラを持っている人が多くなりましてね。以前は根廻りを持って歩いた人が多かったが、今はカメラというほうが好ましい事ですね。自分流の図鑑を作った思い出として楽しんでいる方も

多いようですね。でも三期など使わないため微妙なところで難しいですね。

☆植物、カメラを通して自然環境の変化を多く感じられていらっしゃると思いますがいかがですか。

☆近年、短時間で大規模な開発が行なわれる傾向が多くなっていますが、植物を撮影に行つて花時期が終わってしまつていて、また来年撮りなおそうという発想が段々出来なくなつてきている。来年そこに行つても跡かたもなくなつていくことが度々ありますので、無理な仕事になりません。

☆夕張岳といえば梅沢さんと言われるほどたいへん夕張岳にはお詳しく、思い入れも、方ならぬものがあるのでしょうか。夕張岳スキー場問題ではまだまだ予断の許さない状態ですが、この頃はどのように思われていますか。

☆子供に残していかなければならない優れた自然が各地にあり、それが危機に晒されている状況にありますね。残していく運動はしていかなければならないが、はやり運動は一人でやる限界は感じています。身近な自然は残してはほしいです。全道各地の山を歩いてきてあんな狭い面積(夕張岳)にあれば多様な植物が生育しているのは他に無いのです。またそこにはない花もあります。何回も通つて撮影してきただけに自分にとっては身近な自然という事で何とかしなければと考えています。是非守つていきたいですね。それには天然記念物の指定などを早急を実現させてほしいが、夕張市、林野庁、道など実現後の管理の問題で二の足を踏んでいるようです。日本の行政も縦割りでおたがいに押し付けあうところがあり、腹立たしいですね。

☆こんな素晴らしい夕張岳の魅力を日本中の方全部に分かつてほしいです。さらに地元の方に理解を促すために当協会も今年中に地元夕張市において、講演会とシンポジウムなどを予定していますがいかがですか。

☆多分、何らかの形で関わり協力することになりましょうね。北海道の私は私を含めて引つ込み思案というが目立つことは避けたい傾向にあります。声を出していかなければどんどん開発の波に自然が飲み込まれてしまい、後で後悔しても取り返しがつかなくなつてしまいますね。スキー場を作れば経済が立ち直れるかという疑問で、発想が夕張岳らしいとい

うものがあります。夕張岳でなくても出来るスキー場などということにとらわれず、もっと夕張岳を生かす道はあると思います。ましてや、労働者の助成を受けて再整備されるマウント・レースイ、スキー場が夕張市にはありますし、夕張岳はそのまゝにして活用できる道を考えるべきだと思います。

☆梅沢さん自身夕張岳、夕張市が今後どのようにあつてほしいですか。

☆夕張岳じたいは現状のままが一番いいのですが、こういう利用の仕方はどうだという誤解を受けますので、私ならこのような発想するというのがあります。例えば、道立の自然史博物館を誘致して、国際的にも花の町ということ定着させて、学術会議や学会とか、各種の会議を夕張市でほとんど開催できるように、終了後は夕張岳を見てもらうという、私ならそんな発想をします。短期間で収入があるようなことではありませんが、文化を長期的に育てていくということになれば、夕張岳という宝を持っているので、他の市町村では出来ないことができると思います。何時迄もスキー場にこだわつてもいいスキーそのものが何時迄もブームであるわけがなく、スキー人口も減つていくのではないのでしょうか。その結果、山がはげ山として残るといふのは悲しいですね。

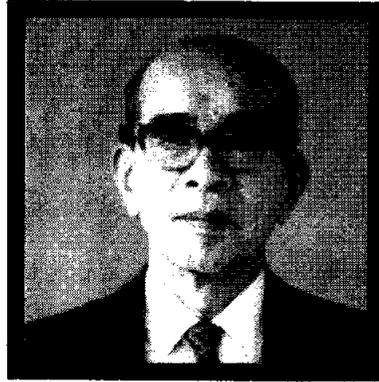
☆当協会の会誌28号にも夕張岳についてお書きいただきましたが、夕張岳に関心のある方が多く、梅沢さんが書いたという話もあり、けっこう売れています。そういったことで運動の励みにもなると思っています。当協会の会員であるということも一つの運動につながると思いますが、梅沢さんのように、会員ではないが、会にとらわれず思慮のない意見を出しているだけの人も貴重なこととあります。

☆勝手なことを言うときもありません。個人でやる限界がありますので組織でなければ出来ないということもありません。それぞれ役割分担で特長を生かしてやつていけばいいと思います。

梅沢さんは夕張岳に対する思い入れが強い分スキー場問題に対しては大変憤りも大きいようです。この憤りが全国にいる梅沢ファンをおおして大きな波になってくれたらと思われまます。カメラを通じて私たちにいつまでも美しい夕張の花を紹介くださるよう願っています。

# 犬飼先生の御逝去を悼む

渡辺 千尚



犬飼哲夫先生の御逝去を心からお悔み申し上げます。

先生は信州松本の在に生れ、幼少のころから自然に親しんでおられました。そして札幌に遊学してからは、北の自然に心打たれ、北樺太学術探検や大雪山学術調査に参加して、野生動物調査の第一歩を踏み出したのであります。だが、先生が本格的に北国の野生動物の探訪に乗り出したのは、昭和七年に海外留学から帰って来られてからのことでありました。ヒグマ、エゾオオカミ、ナキウサギをはじめ数多くの北海道の野生動物の調査を山に海に実施するとともに、貴重な資料、文献を整理して、北海道野生動物の研究の基礎を固められたのであります。先生は野生動物の研究ばかりでなく、北海道に残した数々の貴重な業績は枚挙にいとまなく、今更私がかこで述べるまでもありません。

さて、先生と私とは学問上ばかりでなく、山の友としての長いお付き合いがあったのであります。先生は野生動物の調査には山登りの知識が必要なことに心付かれて、北大山岳部に入部することになりました。山岳スキー術を初歩から習

得するために、スキーの合宿に参加して、毎日朝早くから、激しい訓練に若い部員と一緒にってはげみました。そしてすっかり合宿の雰囲気は溶け込んでしまわれたので、教授は雲の上の存在とばかり思い込んでいた部員をして、「先生は博士ですか？ 平民的な方ですなあ!!」という名言(?)を吐かせたことがありました。

その後先生は山岳部員としばしば山行をともにして、大学の研究室では味わうことのできない山の生活を楽しみ、また野生動物の調査に大きな成果を挙げることもできたのであります。私は山岳部員であり、同学のよしみで、先生と山行をともにする機会をたびたび持つことができました。石狩川の源流を探り、たまたま大雨に見舞われて、籠城を余儀なくされたものの、ヤマベヤキノコなどの山の幸を満喫して、調査の目的も十分果たしたことがありました。波一つない摩周湖を舟で廻り、中央の孤島に上陸したりして、神秘に打たれたこともありました。真冬の愛別岳の瘦尾根に先生と二人して挑戦して、残念にも吹雪のために引き返したこともありました。石狩川の古川に

網を入れて、一・五メートルに達する大鯉を捕獲して、びっくり仰天したものの、これを中華料理店に持ち込んで、一同で舌鼓を打ったこともあり、どれもこれも楽しい思い出ばかりであります。

先生と私とは専攻が違い、教室も別でしたが、出来上がった英語の論文に目を通して、懇切丁寧に添削していただいたことが、たびたびありました。ここにいろいろとお世話になった先生に厚く御礼を申し上げますとともに、楽しかった先生との山行を回想して、心より先生の御冥福をお祈りして、筆をおくことに致します。

(元北海道大学教授・昆虫学)

犬飼哲夫(いぬがい てつお)

明治三十年十月三十一日長野県に生る。

北大農学部卒、北大名誉教授

昭和三十九年より四十七年迄当協会副会長

昭和四十八年より五十二年迄理事

昭和三十七年道文化賞

昭和三十八年道新文化賞

昭和四十三年勲二等瑞宝賞

昭和四十九年道開発功労賞

受賞

# 陳情書 要望書 意見書

知床森林生態系保護地域設定委員会委員の  
選任についての要望

一九八九年七月五日

北海道管林局長 角盛雄雄殿

北海道自然保護協会 会長 八木健三

御北海道自然保護協会 会長 八木健三  
去る六月二十一日、貴局企画調整部長が  
ご来所され、当職が表記委員会委員に就任  
することについてご依頼がありました。その  
後、本件について協合理事会に報告  
し、了承を得ましたので、会長が委員に就  
任することは承諾いたします。

しかしながら理事会においては下記の理  
由により、表記委員会委員に自然保護団体  
の代表などを、さらに幅広く加えることが  
望ましいとの見解がまとめられましたので、  
特段のご配慮をいただけますようお願い  
いたします。

## 記

この知床森林生態系保護地域設定は、一  
九八六年から八七年へかけて惹起された、  
いわゆる「知床森林伐採問題」を契機とし  
て、林野庁長官の諮問機関としての「林業  
と自然保護に関する検討委員会」が設けら  
れて審議された結果、昨年十二月に同委員  
会がとりまとめた報告に基づいて、保護地  
域としての方向がうち出されたものと承知  
しております。

ところで今回の知床森林生態系保護地域  
設定委員会委員(案)の構成員の中には、  
自然保護団体の代表は北海道自然保護協会  
会長のみであると同っております。ご承知  
のように、「知床森林伐採問題」は多くの自  
然保護団体や自然愛好家の熱心な運動、さ  
らには報道機関のキャンペーンなどが相  
まって、幅広い国民的世論が形成されたも  
ので、中でも北海道自然保護連合および知

床自然保護協会の運動は大きな影響を与え  
たものと理解しております。今回はこう  
知床地域の保護地区の具体的な「線引」が  
検討されるわけであり、これからの  
自然保護団体の意見が直接に反映されるこ  
とが望ましいと考えられます。

前記「検討委員会報告」の中にも「あら  
かじめ地域施行計画の策定の段階で、十分  
に国民及び地域の意見を反映するための手  
法を検討することが必要」とあり、また林  
野庁が本年四月に示した「保護地域設定要領」  
の中にも、「森林生態系保護地域設定委員  
会」の発足に関して「有識者の選定に当た  
るものとする」と明記されております。

以上の理由により自然保護団体の代表を  
さらに幅広く選任されるよう要望いたしま  
す。

なお、生態系をより幅広く専門的に検討  
するため、例えば土壌学の専門家などをさ  
らに委員に加えることについても併せてご  
配慮くださるようお願い申し上げます。



## 協会の活動

(会場記載のないものは  
事務所で実施、敬称略)

### 議事録要約

一九八九年度第一回常務理事会(拡大)  
一九八九年五月二十四日

出席者 八木健三、徳浩三、中野徹三、紺  
谷友昭、福地郁子、柳沢信雄、前田重和、  
久万田敏夫、熊木大仁(九名)

一、白旗山スキー距離コースの件

関係者から説明を受け検討の結果、札幌  
市に対しスキー距離コースに慎重な対処を

求める要望書を提出することに決まった。  
二、夕張岳スキー場問題の件

協会より夕張市へ提出する「夕張岳ス  
キー場計画白紙撤回について」の要望書の  
内容を検討し、来週はじめに提出すること  
が承認された。

三、原発シンボジウムの件

本件については次回開催の原発シンボ実  
行委員会の結果で判断することとなった。

一九八九年度第二回常務理事会(拡大)  
一九八九年六月二十一日

出席者 八木健三、徳浩三、中野徹三、紺  
谷友昭、柳沢信雄、前田重和、久万田敏夫、  
熊木大仁(七名)

報告 北海道管林局より、知床国有林保護地  
域検討委員会の委員に就任要請があったの  
で受諾した旨会長より報告があった。

議案 一、五月分決算報告  
高橋事務局長より説明があり承認され  
た。

二、会費未納会員の件  
会費未納を続けている会員のうち理事が  
個人的に連絡可能な人に対しては、極力納  
入を働きかけることになった。

三、会誌・会報編集の件  
会誌、会報の編集の進み具合について説  
明があった。会誌についてはカラーページ  
を入れるため予算をオーバーするが、オー  
バー分は予備費を充当することが了承され  
た。

四、自然観察指導員資格更新の件  
日本自然保護協会では、今年度から指導  
員の資格更新時に入会を義務づけ、三分  
分の会費を前納させる方針をうたったが、  
納得できないことなどで改善するよう申し  
入れることとした。

五、原発シンボジウムの件  
当協会が原発シンボジウム実行委員会に  
加盟するかどうか検討を重ねてきたが、加  
盟しないことに決定した。

六、コウライキジ捕獲禁止公聴会の件  
七月十三日の公聴会には三浦副会長が出  
席し、禁止に賛成の陳述することに決

まった。  
七、知床シンボジウムの件  
連合より知床シンボジウム募金活動の協  
力を要請があり、協力することに決まった。

一九八九年度第三回常務理事会(拡大)  
一九八九年七月四日

出席者 八木健三、三浦二郎、徳浩三、中  
野徹三、紺谷友昭、熊木大仁、平井百合子  
(七名)

議案 知床森林生態系保護地域設定委員会(案)につ  
いて 同委員会の構成員中自然保護団体が当協  
会のみである点につき議論した結果、連合  
と知床自然保護協会を委員に加えるよう管  
林局長に文書で要請することに決まった。

一九八九年度第四回常務理事会(拡大)  
一九八九年七月二十八日

出席者 徳浩三、中野徹三、紺谷友昭、福  
地郁子、柳沢信雄、平井百合子、前田重和  
(八名)

議案 一、六月分決算報告  
高橋事務局長より報告があり承認され  
た。

二、知床森林生態系保護地域設定委員会  
の件 七月十七日に同委員会の第一回会合が開  
かれた。その席で林野庁から、十月に保護  
地域・遺伝資源保存林の原案を出し、本年  
度中に結論を出したい旨の方針が発表され  
た。

三、千蔵川放水路の件  
質問状に対し八月十八日に開発局より回  
答があり、六団体が局側と討議した。次回  
は八月三十一日の予定である。

三、夕張岳の件  
八月二十九日に予定されていた夕張市の  
説明は、国土計画の準備が間に合わぬとい  
う理由で中止となった旨報告があった。地  
元活動は重要なので、今後の対応につい  
て地元と打合せする機会を持つこととした。

四、その他  
リゾート法及び森林の保健機能増進特別  
措置法案は森林開発が容易となり、自然保  
護運動にとって憂慮すべき内容であるの  
で、関心を持って対処していくことが確認  
された。

の報告があった。  
三、コウライキジ捕獲禁止公聴会の件  
七月十三日の公聴会において、捕獲禁止  
期間を延長するという道方針に公聴人全員  
賛成であった旨報告があった。

四、利尻島のウミネココロニーの件  
提案の理事が欠席のため継続審議とな  
った。

一九八九年度第五回常務理事会(拡大)  
一九八九年八月二十五日

出席者 八木健三、徳浩三、中野徹三、紺  
谷友昭、福地郁子、柳沢信雄、大友健、前  
田重和、熊木大仁(九名)

報告 一、知床森林生態系保護地域設定委員会につ  
いて 委員会に自然保護団体の意見をどう反映  
させるかについては、連合の会議の結果を  
参考に考える。

二、自然保護課の本の件  
身近な自然をテーマに各地活動家に原稿  
を依頼する。道自然保護課も企画に加わる。

議案 一、七月分決算報告  
高橋事務局長より報告があり了承され  
た。

二、千蔵川放水路の件  
質問状に対し八月十八日に開発局より回  
答があり、六団体が局側と討議した。次回  
は八月三十一日の予定である。

三、夕張岳の件  
八月二十九日に予定されていた夕張市の  
説明は、国土計画の準備が間に合わぬとい  
う理由で中止となった旨報告があった。地  
元活動は重要なので、今後の対応につい  
て地元と打合せする機会を持つこととした。

四、その他  
リゾート法及び森林の保健機能増進特別  
措置法案は森林開発が容易となり、自然保  
護運動にとって憂慮すべき内容であるの  
で、関心を持って対処していくことが確認  
された。

# 行事のご案内

## ●紅葉の植物園を歩こう

身近かな場所で紅葉の秋を見つめますか。

日時／十月二十九日(日)午前十時～十二時迄

二時迄

場所／北大附属植物園

正門前十時集合

講師／原松次(野生植物研究者)

入園料／一人…三六〇円

○参加される方は早目に協会にご連絡下さい。  
(☎二五一・五四六五)

お詫び

去る十月一日、野幌森林公園大沢口にて行われた「キノコを見よう」(道新九月二十五日に案内掲載)の観察会は、会報の発行日の関係で周知できませんでしたことをお詫び申し上げます。

# 講演会のご案内

日時／十二月三日(日)

午前九時～十時半

場所／夕張市ファミリースクール・ふれあい

あい

講師／石城謙吉(北大苫小牧演習林長)

☆前期の講演会は十二月二日～三日迄行われる「あすの夕張と自然を考える」

ンポジウム」の中で当協会主催で講演

会を行います。

予定では、

十二月二日(土)

当協会理事、寺島一男(大雪と石狩の

自然を守る会)、神原昭子さん(全国消費

者連盟事務局)等のパネラーでデスクッ

ション。夕方は梅沢俊さん(植物写真家)

のスライド上映予定。

十二月三日(日)

前記の講演会等行いますがまだ未定の

部分がありますので、くわしくは協会に

お問い合わせください。

# 原稿募集

原稿をお寄せ下さい。身近な自然の歳時記や感想文、自然保護に対する意見、自然観察の記録や調査研究の成果など。また、写真やスライドも歓迎いたします。

# 寄贈図書

寄贈者 八木健三

●復旧への足跡(地附山地すべりの記録)

地附山地すべり記録誌編集委員会

●道南の自然を歩く 北大図書刊行会

●母なるブナ 長野県自然保護連盟

●国際時代のナショナル・トラスト運動

第六回ナショナル・トラスト全国大会の記録

寄贈者 俵 浩三

# 寄付金

●北海道の自然と生物 樺 書店  
寄贈者 北海道自然保護課  
●北海道自然環境保全指針 北海道

北海道生花商協同組合から創設三十周年記念として、自然保護に役立てるよう十万円の寄付をいただきました。そのほか次の方々から寄付をいただきました。

阿部 審也 一〇〇〇円  
住友建設㈱北海道支店 二〇〇〇円  
吉見 久 一八〇〇円  
中井 惺 一〇〇〇円



# 事務局からのお願い

本年度の会費納入期限は四月三十日になつておりますので、未納の方は至急お納め下さい。昨年度以前未納の方も合わせてお納め下さい。

個人A会員 四〇〇〇円  
個人B会員 二〇〇〇円  
(A会員と同一世帯の会員)  
学生会員 二〇〇〇円  
団体会員 一口 一〇〇〇〇円  
〔会費納入方法〕

郵便振替口座 小樽一四〇五五  
北海道拓殖銀行本店〇一七二五九(普通)  
北海道銀行本店 一〇一四四四(普通)  
なお、住所を変更された方はお手数ですが、その旨ご通知下さるようお願い致します。

一九八九年十月二十日発行

〒札幌市中央区北三十四一 加藤ビル5 六階

発行所 社団法人 北海道自然保護協会

電話 (〇一一)二五一―五四六五

発行人 八 木 健 三

印刷 ㈱北海道機関紙印刷所